

## 【研究ノート】日本における山岳遭難を社会心理学的視点から 論考できるか

田中 堅一郎  
日本大学大学院総合社会情報研究科

### Can We Discuss about Mountain Disasters in Japan by the Aspect of Social Psychology?

TANAKA Ken'ichiro  
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

In Japan, more than 3,300 mountain accidents occur every year. Despite the many mountain accidents in Japan, there are few studies that have discussed these accidents from a social psychological perspective. In this article, the author discussed cases of mountain disasters in Japan, citing normalcy bias, escalation of commitment, and several leadership theories. In addition, the author discussed that the possibility of discussing mountain disasters in mountaineering parties from the perspective of groupthink.

---

#### 1. はじめに

読者諸氏はこのような題を見て著者が相当な山岳フリークか、あるいはかつて山岳部に所属していた今でも『山と溪谷』の定期購読者なのかと思われるかもしれない。実はそんなことは全くない。著者の自宅は中央線沿線にあり、その路線で山梨・奥多摩方面に行けばたしかに手頃な登山コースがいくつかあることを著者は知っている。ただ、著者は山に登るという行為には全く関心がなく、登山といえる経験といえば、中学・高校時代に学校行事で北九州市近郊の低山（英彦山、皿倉山など）に登ったとか、約30年前の浜松市在住の頃に志賀高原へドライブして東館山に登ったくらいである。著者が関心をもっているのは登山でのトラブルや事故、遭難についてであり、たまたま山岳遭難についてのレビューをYouTubeで見る機会があり、そうした事例を調べれば調べるほどそれらが極めて「社会心理学的」だと思わずにはいられなかったからである。ただ、心理学の視点から山岳遭難を論じた例は（少なくとも日本には）意外にもきわめて少ない（例外としては、

村越（2022）がある）。さらに、著者が見た山岳遭難についてのYouTubeのいくつかには遭難事例の解説にしばしば心理学用語が登場するのだが、その用例が正確でない（あるいは解説者の心理学用語の理解ができていない、理解が雑である）ことがあり、大変気になっていた。それならば、産業・組織心理学や社会心理学が専門領域の著者自らが山岳遭難について論考すれば話が早いのではないかと思い立った次第である。

#### 2. なぜ日本の山岳遭難に絞ったのか

その理由としては、まず日本だけでも遭難件数が多く研究対象となる事例が豊富なことである。警察庁生活安全局の報告では、山岳遭難は年々増えている。特に（コロナパンデミック期の2020年を除く）2010年位から急激に増加している（図1）。日本の山岳遭難で特に有名なのが、谷川岳（新潟・群馬の県境；1977年）で、1931年から2020年6月までに、死者818名、行方不明者6名で、「世界一遭難者（死者数）の多い山岳」としてギネス認定されたとされ

ている<sup>i)</sup>。

図1 日本における山岳遭難の概況



注:「遭難者数」には、昭和51年から無事救出者を含む。

出典：警察庁生活安全局生活安全企画課 (2025)

さらに、日本では山岳遭難件数が多いこともあり、かなり前 (1960 年くらい) から遭難記録が多数残っており、中にはかなり詳細な遭難報告書やドキュメンタリー (例；羽根田, 2015, 2020) があり比較的資料に目を通しやすいからである。

### 3. なぜ山岳遭難が「社会心理学的」なのか

山岳遭難の過程が社会心理学的に論考可能な理由には以下の3点があげられる。

#### 3.1 “自分は遭難しない”

多くの (とくに登山経験が多い) 登山者は“自分は遭難しない”とか登山中に様々なトラブルが生じても“これは遭難ではない”と信じ込む傾向がある。社会心理学ではこれは正常性バイアスとよばれる。正常性バイアスとは「災害や事故などのリスクについて、「大したことにはならないはず」「自分は大丈夫だろう」など、ある程度までの異常を正常の範囲内とみなしてしまう心理的傾向性のこと」(『有斐閣現代心理学辞典』有斐閣, 2021) とされる。登山者が“自分 (自分たち) が遭難したかもしれない”と思ったときは、すでに遭難してから時間が経過していることが常であり、山岳救助隊に連絡が届いても遭難場所に到着するまでには半日以上かかることはよくあることで、その間登山者が救助まで待機中に低体温症などで死亡する事例も少なくない。

「何度も登ったことがある山なので、(この山に関しては) 私は遭難するはずがない」と信じ込むのも確率論的に間違っている。すなわち、同じ山に何度も登山した場合、遭難に遭遇する確率は高くなる。例えば、ある山に1回登山して遭難する確率 ( $\alpha_1$ ) が仮に 0.5% だとすると、同じ山を 100 回登ったら、100 回目の登山までに一度でも無事に帰れない (遭難する) 確率 ( $\alpha_{100}$ ) <sup>ii)</sup> は、以下のように示される：

$$\alpha_{100} = 1.0 - (1.0 - \alpha)^{100} \approx 0.3942$$

この確率 (40% 弱) はかなり高い数字ではないだろうか。実際に、後述の「1994 年吾妻山スキーツアー遭難事故」のように登山経験 20 年、30 年のクライマーが今まで何度も登山経験のある山で道迷いになって遭難する事例には事欠かない。

#### 3.2 “あともう少しで頂上だから”

登頂目的の山が自分の住んでいる近所であれば話は別であるが、一般的に山岳登山は遠方から陸路・空路で移動し、さらに麓から頂上まで移動するまでに山小屋で宿泊するといった大がかりな登山計画を伴っていることが多い。当然下山までの日数もかかるので経済的負担も大きくなる。そこで荒天になっているにも関わらず、“せっかく遠くからここまで来たのだから”と登頂を強行して、登頂はしたものの下山途中に「道迷い」になって遭難する、といった遭難事例はかなり多いようである。

登山という行為は多大な時間、エネルギー、そして金銭を投資しなければならない。だが、もし荒天や諸事情のために投資した成果が得られない (登頂ができない、できたとしても日没前までに下山できない) ことがわかったとしても、引くに引けなくなる。すなわち、もし登山を中止するならこれまで投資した費用はもう戻ってこないことは自明だが、一方で、これ以上登頂達成のために投資しつづければ「焦げつき」(すなわち山岳遭難) を起こしかねない。これを回避するには投資をすぐにやめる (下山する) のが合理的選択のはずである。しかし、(登頂断念によって) 当初の (登頂までに要した) 膨大な投資が無駄になることはあまりにもったいないと感じてしまうために、最終的には「大丈夫！ きっと無事に

登って帰れる」と信じて無理に登頂して結局遭難する。こうした現象は、コミットメントのエスカレーション (escalation of commitment) の事例と考えられる。石田(1997)によれば、コミットメントのエスカレーションは「ある程度長期にわたる一連の行動に着手して、時間や労力、金銭などを投資したが、思い通りの結果が得られず、目標達成の見込みも少ないが、それでもなかなか中止することができず、さらにコミットメントを増大させることになってしまう状況、あるいはそのような現象」として用いられてきた。バイザーマン・ムーア(2011)は、ひとたび人が意思決定して行動をおこすと、ネガティブなフィードバックと不協和をおこし、その不協和を解消するために「きっと最後は成功するだろう」と信じて最初の行動へのコミットメントをエスカレートさせると説明している。

「良心的な」登山関係者はしばしば「山は逃げない」と言って無理な登頂を戒めているが、「もったいない」精神が結果的に無謀な登頂へ動機づけてしまうといえるかもしれない。

### 3.3 “登山リーダーがそう言っているから…”

登山の方法は、集団登山(あるいはグループ登山)と単独登山とに大きく区分される。単独登山はいくまでもなく、最初から最後まで単独行動による登山である。一方集団登山は2名以上の登山者が合同で登山する<sup>iii</sup>。たまたま著者のこれまでの研究課題の一つがリーダーシップであった(田中, 2021)ため、山岳遭難において登山リーダーがどのように行動したかについて興味があったので、ここでは集団登山に話題を絞る。

登山リーダーとは、「登山の際に生じる様々な危険に適切に対処し、登山を成功に導くために、パーティを指揮統率する立場の者」(辻, 1999)とされ、登山がトラブルなくメンバー全員が下山するために重要な役割を担っている。一方で、登山リーダーの不適切な判断や行動が山岳遭難の発生原因となったと思われる事例がかなり多い。それら山岳遭難事例を登山リーダーのリーダーシップの特徴からいくつかの категорияに整理してみたい。

**3.3.1 「なあなあリーダー」<sup>iv</sup>** ここでのリーダーシップ・スタイルは、自らリーダー役を名乗り出な

ったものの、構成メンバーからの要望・推薦でメンバーの誰かがとりあえずリーダー役を担う場合である。クルト=レヴィンらのリーダーシップ3類型(ホワイト・リピット 中野・佐々木訳, 1959)でいえば「放任型」に相当する。

該当する山岳遭難としては、以下の事例がある：  
①1989年立山大量遭難事故(メンバー10名中8名死亡) この事故では、誰が登山リーダーなのか決まらないままに、曖昧な2名の「リーダー役」によって登山を中止して引き返す判断力が低下したとされる(羽根田, 2020)。  
②2009年北海道トムラウシ山ツアー登山遭難事故(15名中8名死亡) この事故ではツアー・リーダーが登山途中で急死してしまい、ツアー・グループが動揺していたにもかかわらず、代理店からの派遣ガイドが大事な局面で沈黙してしまい、遭難時での意思決定がままならなかったとされる(羽根田, 2020)。

**3.3.2 カリスマ的リーダー** カリスマ的リーダーは「周囲からずば抜けて高い評価をされている人物に備わった資質であり、そのような人物には、自信や優越感、目的意識、目的や理念を明確な言葉であらわす能力がある」(コンガー・カヌンゴ他 片柳ほか訳, 1999)と心理学領域では説明されている。山岳登山におけるカリスマ的リーダーとは、登山仲間が「人望がある」と見做していて、登山経験も豊富であり、かつ登山リーダーとしての経験もある。ただ、そのためメンバーはこのリーダーに何もかも依存して「お任せ」してしまい、非常事態が起こっても各々のメンバーは何もできなくなる。

この登山リーダーの下での山岳遭難事例としては、1994年吾妻山スキーツアー遭難事故(7名中5名死亡)がある。ここでの「カリスマ的リーダー」とは24年間スキーツアーを企画していたS氏で、彼の求心力をメンバーが過信して、尾根で道迷いして迷走していたときに誰もS氏に積極的な助言ができなかったとされる(羽根田, 2020)。

**3.3.3 専制的リーダー** このスタイルのリーダーは集団構成員に対して自分が決めたことを行うよう求め、頭ごなしに命令する。また、このタイプのリーダーはしばしば自意識過剰な言動(「ベテラン登山者の言うことは聞くものだ!」)を行い自信過剰気味な

ので、自分が山岳遭難に遭うと想定していないし、遭難してもそれを認めないことさえある。ここでのリーダーシップ・スタイルは、クルト＝レヴィンらのリーダーシップ3類型（ホワイト・リビット 中野・佐々木訳, 1959）で「専制型」に相当する。

遭難事例としては、2005 年乳頭山遭難事故（メンバー43 名、死傷者なし）がある。登山経験豊富な高齢者リーダーの自信過剰にメンバーが盲従したため、登山リーダーは道迷いとなってもそれを最後まで認めず、メンバーが適切な助言を行えなかったとされる（団塊の世代一代記(Akimasa Net), 2005）。

**3.3.4 非倫理的リーダー** 山岳登山において、登山経験の少ない（あるいは殆どない）にもかかわらず登山リーダーとして強引な登山を行ったり、あるいは経験は豊富ではあるがメンバーに登山途中で過酷な要求をするリーダーがこれに該当する。このタイプのリーダーシップに相当するのは、心理学や組織行動論では破壊的リーダーシップ（destructive leadership）で、「リーダー、上司、管理者によって体系的かつ繰返しなされる行動であり、組織の目標、課題、資源、効率性、あるいはまた部下のモチベーション、健康状態、職務満足感を衰えさせたり妨害したりすることによって、組織の正当な利益を侵害する」行動が特徴とされる（Einarsen, Aasland, & Skogstad, 2007）。

該当する山岳遭難としては以下の事例がある：① 1980 年逗子開成高校北アルプス遭難事故（6 名全員死亡） 登山未経験の高校生を登山経験の少ない引率者（教員）が、悪天候の中強引に登山強行して遭難し、全員死亡に至ったとされる（本田, 1997）。② 2009 年鳴沢岳遭難事故（3 名全員死亡） 京都府立大学山岳部顧問で大学助手 I 氏が「訓練」と称して、女子大学生（21 歳）に荷物を持たせた上に悪天候の途中で置き去りにして、I 氏自身も遭難して死亡した（羽根田, 2020）。

ちなみに、1999 年羊蹄山登山ツアー遭難事故（参加者 16 名中 2 名死亡）では、ツアー添乗員が遭難に至っても適切な対応を行わなかったとして、業務上過失致死罪により禁固 2 年、執行猶予 3 年の有罪判決を受けた（佐々木・小林・山田, 2006）こともあり、今後は実質的な登山リーダーを担う登山ツアー添乗

員にも、コンプライアンス遵守の観点からも的確なリーダーシップが求められるだろう。

## 4. 今後の展開

まず、著者が山岳遭難を社会心理学の視点から論考するようになってまだ間がないこともあり、本稿ではとりあえず日本の山岳遭難の事例に限定したが、今後は海外での山岳遭難に関する（とくにアルプスやヒマラヤ諸山に関連する）社会心理学的研究の動向にも目を向ける必要があるだろう。

また、これまで山岳遭難およびその回避方法をリスクマネジメントの視点から心理学的考察を行った事例はある（村越, 2022）ものの、遭難後の登山者についての心理学的諸問題は、著者の知る限りあまり研究が行われているとは思われない。日本では自然災害による被災者の「心の傷」についての心理学的研究は行われてはいる（大森, 2015）が、山岳遭難から救助された「サバイバー」については事例報告（例えば、羽根田, 2024）はあるものの、あまり学術研究の対象にはなっていない。山岳遭難後救助された登山者は遭難に至った経緯についてしばしばマスメディアや SNS で非難されるなど、様々な心理的ストレスを被ると思われる。そして、こうしたストレスから遭難サバイバーがどう立ち直っていけるかについても研究対象となりうるだろう。

さらに、社会心理学では集団合議による意思決定の落とし穴として集団浅慮（groupthink）<sup>v</sup>が取り上げられることがある（Janis, 1982 [細江訳, 2022]）。集団浅慮とは「集団による意思決定が、個人で行うときよりもかえって不適切で愚かなものになること」

（『有斐閣現代心理学辞典』有斐閣, 2021）とされる。Janis（1982）が紹介した集団浅慮の事例はアメリカでの政策決定であったが、集団登山での山岳遭難にも適用事例があると思われる<sup>vi</sup>。「3.3.2 カリスマ的リーダー」で述べられたように、登山仲間から「人望がある」と見做されて、登山経験も豊富な登山リーダーにメンバーが何もかも依存して「お任せ」してしまい、「おかしい」とメンバーが感じて何も言えず、非常事態が起こってもメンバーは何もできなくなるため、遭難しやすくなるだろう。この論点から山岳遭難事例を再検証することも可能かもしれない

い。

## 引用文献

- ベイザーマン, M.H・ムーア, D.A. 長瀬勝弘訳  
(2011). 行動意思決定論 バイアスの罠 白桃書房
- コンガー, J.A・カヌンゴ, R.N. 他 片柳佐智子・山村宜子・松本博子・鈴木恭子訳 (1999). カリスマ的リーダーシップ ベンチャーを志す人の必読書 流通科学大学出版
- 団塊の世代一代記 (Akimasa Net) (2005). 乳頭山遭難 43 人 <https://dankai.akimasa21.net/nyutosan-accident/>
- Einarsen, S., Aasland, M.S., & Skogstad, A. (2007). Destructive leadership behaviour: A definition and conceptual model. *The Leadership Quarterly*, 18, 207-216.
- 羽根田 治 (2015). 山岳遭難の教訓 事例に学ぶ生還の条件 山と溪谷社
- 羽根田 治 (2020). 十大事故から読み解く 山岳遭難の傷跡 山と溪谷社
- 羽根田 治 (2024). ドキュメント生還2 長期遭難からの脱出 山と溪谷社
- 本田勝一 (1997). リーダーは何をしていたか 朝日新聞社
- 石田正浩 (1997). コミットメントのエスカレーション 田尾雅夫 (編著) 「会社人間」の研究 ―組織コミットメントの理論と実際― (pp. 140-165) 京都大学学術出版会
- Janis, I.L. (1982). *Groupthink: Psychological studies of policy decisions and fiascoes (2nd Edition)*. Houghton Mifflin School. (細江達郎訳 2022 集団浅慮 ―政策決定と大失敗の心理学的研究

## 注

<sup>i</sup> ただし 2026 年 1 月 6 日時点では、これについてギネス公式記録として公開されたとされる数字を著者は見せなかった。

<sup>ii</sup> 「山に登る」という 1 回の行為は何度も登山していても、当日の登山での天候条件や登山者の体調等が(過去の登山と)全く同じことはありえないから、確

新曜社)

- 警察庁生活安全局生活安全企画課 (2025). 令和 6 年における山岳遭難の状況等 <  
<https://www.npa.go.jp/news/release/2025/20250612001.html>>
- 昆 正和 (2017). 山のリスクセンスを磨く本 山と溪谷社
- 村越 真 (2022). 遭難からあなたを守る 12 の思考 山と溪谷社
- 大森哲至 (2015). 災害のトラウマと心のケア 森下高治・蓮華一己・向井希宏 (編著) 現代社会と応用心理学 4 クローズアップ「メンタルヘルス・安全」(pp. 247-257) 福村出版
- 佐々木正人・小林勝法・山田紘祥 (2006). スポーツツアー事故における旅行業者の法的責任に関する一考察 ―羊蹄山登山ツアー遭難事故から― 文教大学国際学部紀要, 16(2), 13-29.
- 田中堅一郎 (2021). 自己概念から考えるリーダーシップ ―リーダーの多面的自己概念と発達に関する心理学的研究― 風間書房
- 辻 次郎 (1999). 登山事故の法的責任 (上) 判例タイムズ, 997, 38-49.
- ホワイト, R・リビット, R. 中野繁喜・佐々木薫訳 (1959). 三種の「社会的風土」におけるリーダーの行動と成員の反応 カートライト, D・ザンダー, A. 三隅二不二・佐々木薫訳編 グループ・ダイナミックス II [第二版] (pp. 629-661) 誠信書房.
- 山岸俊男 (2015). 徹底図解 社会心理学 新星出版社

率論的には独立事象とみなす。

<sup>iii</sup> 辻(1999)によれば、複数の登山者からなる「登山グループ」の形態には、引率登山(登山リーダーないし主催者が計画を立てるなど中心的な役割を果たす場合)と自主登山(特定の者が一応リーダーとなるが他のメンバーも山行計画に関与するなど積極的に登山に関与する場合)とがあるとされる。

<sup>iv</sup> この名称は昆 (2017) から援用した。

---

<sup>v</sup> 集団思考と訳されることもある。

(Received: January 28, 2026)

<sup>vi</sup> 実際に山岳遭難が集団浅慮の事例として上げられている社会心理学のテキストがある（山岸, 2015）。

(Issued in internet Edition: February 10, 2026)